

センターつうしん

第11号 2025年8月

仙台・羅須地人協会



大内先生と賢治教室の思い出

大沼 珠恵

NPO法人シニアのための市民ネットワーク仙台（略称：シニアネット仙台）の朗読教室「注文の多い料理店」では毎年9月21日に花巻の賢治祭で行われる「賢治の里で賢治童話を読む」という朗読会に参加していました。

2011年の9月は台風に遭遇してしまいましたが、花巻に宿泊予定だった大内先生を除く3名は嵐の中無事に花巻の台温泉に到着しました。鄙びた温泉宿で4人だけの宴会でしたが会話が弾み、賢治研究をしておられる大内先生に是非教えを請いたいという事に話がまとまりました。

帰仙後、早速大内先生を講師として賢治教室「銀河鉄道の夜」がスタートしました。大内先生の御希望により直ちに取りかかったのは、東日本大震災による犠牲者への鎮魂の祈りを込めてのセミナーを開催することでした。2012年2月18日仙台文学館で開催されたセミナー「宮沢賢治からのメッセージ」は宮沢賢治イーハトーブセンター主催にこぎつけて、準備期間が短かったにもかかわらず200名の参加者があり盛況のうちに終わりました。賢治教室では2011年11月から毎月1回、「銀

河鉄道の夜」から始まり2020年12月の「四又の百合」まで26作品を勉強しました。

晩年の大内先生の賢治研究は地政学からの見地に及びました。特にシルクロードにかけての西域童話の研究はその後のライフワークの一つになったのではないのでしょうか。先生の壮大な賢治研究がまだまだ進化することが楽しみでした。長い間大内先生と共に勉強させて頂くことができたという幸運をかみしめているこの頃です。

朗読を通して

加藤 益子

『注文の多い料理店』が私達朗読教室の活動グループ名です。宮沢賢治の作品名をお借りしました。今年で発足30年になります。早いものですね！

私はシニアネット仙台が始まって二年目に入会したのですが総会の始まりに朗読させて頂き、それが縁で朗読教室をやりなさいと命令されて、もちろん人集めが目的だったことは分かりますが、必死で勉強したものでした。テレビの取材が入ったりするときは私の朗読の先生に見つからないようにと机の下に潜ったりしたものでした。そういう私を知ってか知らずか朗読の先生はいろいろ参考

になるものを提供してくれたものです。

大内先生がお元気だった頃、一年に一度賢治の誕生日に花巻の賢治記念館で舞台発表がありました。途中からの参加でしたが5回位舞台上に立ちました。しかし主催なさった千葉県のおばあさんがちょうど20回目の時に「今回で幕を引きます」とおっしゃっておしまいになりました。

この舞台発表の日は朝7時頃の電車で10人位で花巻へ出掛けました。その中に大内先生もいらっしやいました。花巻に着くとそれぞれがお弁当を買って、会場に着くとまず弁当を食べてしまうのです。開会は午後1時ですので自分達の番がくるまで外で声出しをして本番に備えるのでした。演劇あり、詩の朗読あり、花巻弁でのおしゃべりありで楽しかったです。私達は役割を分担しての群読でした。大内先生もみんなも生き生きとしていて若々しかったです。

その先生も昨年早々にお亡くなりになり、一時代が終わってしまったような気がします。今になってみると本当にいい思い出となりました。やっぱり若かったし良い時代だったと思います。

賢治さん 本当にありがとう！

猛暑に「雪わたり」を読んで

若生 和子

新聞・ラジオ・テレビでは日本経済を左右するアメリカ大統領トランプ氏の関税関係のニュースで賑わっています。

猛暑のなか何気なく娘の本棚を見ましたら、宮沢賢治・作、とよたかずひこ・絵の『雪わたり』の絵本がありました。娘はこの絵本の絵の作者が好きなんだそうです。私もこの絵本を手に取り読みました。

以前に「賢治教室」の講座で『雪わたり』を二回に分けて勉強したことを思い出しました。童話といっても賢治さんのお話は人間のはかり知れぬ深

いものを語っておられます。『雪わたり』でも、「かた雪かんこ、しみ雪しんこ」、四郎とかん子とは賢治さんと妹トシさんのことだと思います。

一時猛暑を忘れ心が洗われて涼しい気持ち、涼しさを感じました。

「人間の幸いとは」、「本当の幸いとは」を追求し続けた宮沢賢治の探求はこれからもずっとずっと続けられる事と思います。

弟の清六さんの兄についてのことばでは、「はあ、そのへんを歩いている人と一向に変わりませんでした」と、飾らない素朴なつつましい農民のような人だったようです。



宮沢賢治[作]・とよたかずひこ[絵]『雪わたり』岩崎書店、2004より

童話では人間の正しい生き方としあわせをもたらす為の佛の教えを伝え、行動としては多くの人々のためにつくしました。

これから初秋に向かいますと、河北書道展をはじめ各派の書道展が開催される事でしょう。その作品の中には宮沢賢治の詩が登場するでしょう。

「雨ニモマケズ」、「銀河鉄道の夜」等は淡墨でも濃墨でも今までもよく見かけました。

今年も書展の会場で宮沢賢治さんの作品に出会えたらと、楽しみにしております。

大沢温泉

加藤 純子

花巻温泉郷の大沢温泉は宮沢賢治が幾度となく訪れた温泉です。ギャラリーには明治39年、10歳の賢治も参加した花巻仏教会夏期講習会の記念写真が展示されています。大沢温泉は、山水閣、湯治屋、菊水館から成ります。湯治屋は約2

百年前の建物でパンフレットには「賢治ゆかりの自炊部」とあります。

共同炊事場には10円で7～8分使えるコイン式ガスと、無料で利用できる電子レンジ、なべ、やかん、食器、箸、スプーンが置いてあります。包丁や熱いお湯が入ったポットは帳場で借りることが出来ます。部屋にはテレビ、冷蔵庫、お茶セットがあり、売店の品揃えも良いので、そば、うどん、パックご飯、レトルトカレー、缶詰、卵、コーヒー、それと当日花巻駅周辺で調達したパン、地酒、お惣菜等を持参すると快適に過ごせます。

湯治屋に「お食事処やはぎ」があるので、ちょっと豪華に食事することも出来ます。2年前湯治屋に2人で3泊しましたが、入湯税込み室料と浴衣を借りて23,100円で宿泊できました。季節によってはコタツや扇風機を借りると別料金です。

山水閣は高村光太郎が「風景や温泉の質も良い」と好んで泊まった宿です。ネットには光太郎ゆかりの「牡丹の間」が載っています。建物は立派で美味しい食事付(食べたことが無いので推測)です。時期にもよりますが1泊の宿泊料金は自炊部3泊分以上になりそうで、まだ宿泊したことはありません。

菊水館は茅葺屋根の160年以上前の建物で、以前は大浴場、客室、食事処を備えた宿でしたが、平成30年に車で橋を渡ることが出来なくなり、今は多目的な茅葺きホールとして営業しています。私は宿泊施設だったころに一度宿泊しています。風景も食事も良かったので、閉鎖になる直前のタイミングで行くことが出来て良かったです。

花巻温泉郷宿泊者対象のシャトルバス(無料)が、新花巻駅から花巻駅、松倉、志戸平、渡り、大沢、山の神、鉛、新鉛温泉のルートで運行されています。花巻駅から大沢温泉までは30分です。昭和44年まで、花巻電鉄が運行されておりました。昭和44年時点で花巻電鉄は花巻～西鉛温泉11往復(軌道)と花巻～花巻温泉20往復(鉄道)していたとのこと。花巻電気軌道設立が1913年(大正2年)で大沢温泉までの開業が1923年(大正12年)のようです。

賢治10歳の時、花巻電鉄はまだありませんが、花巻農学校の教師時代以降は花巻電鉄で大沢温泉に行ったのでしょう。現在のシャトルバスの路線はほぼ電鉄の軌道と同じですので、賢治が電気軌道に乗っていた100年前に想いをはせて温泉に行くのもいいですね。

賢さん 秀さん プラス1

今野 禎市郎

8年前になるが、仙台・羅須地人協会は名取市文化会館で「賢治・秀松 農民芸術祭 耀(かが)う午後」というイベントを開催した。盛岡高等農林学校以来 終生の友人となった宮沢賢治と高橋秀松。賢治は秀松のことをアメリカの著名な植物学者・園芸家・育種家ルーサー・バーバンクをリスペクトして「バアバンク」と呼んだ。農業に詳しい秀松に、賢治はさまざま教えてもらった。公開イベントのコンセプトはふたりの交流に農業あるいは農業協同組合のありよう、新たな視座を見いだすであった。

高橋秀松はのち昭和21年に当時の増田町に農業共済組合を設立しさらに農業協同組合に改組。名取市の初代市長になる。

仙台・羅須地人協会はイベントに向け大内秀明代表(当時)が陣頭に立ち半年余りかけて準備。郷土史に詳しい人を呼ぶなど毎週のように研究会を開いた。隠れた資料の収集や現地調査を丹念に行った。

イベント当日は秀松の出身校、宮城県農業高校の復興和太鼓演奏も入って会場は立ち見が出るほど盛況。大内先生の、「賢さん、秀さん」への強い思いが見事に当たり結実した。

ただ当時の検討資料を見直すと、交流ということで もうひとり入れた方がよかったかとも思っている。その人とは岩手県紫波町出身の加藤謙次郎。旧制盛岡中学で宮沢賢治の3年上級で 学

生寮でとともに過ごした。東北帝国大学理学部に
進み教授に。専門は岩石、鉱床学である。岩手
は鉄の長い歴史をもつ。明治期に鉄鉱石の鉱山
が誕生し、釜石に製鉄所ができた。砂鉄も豊富。
チタン含有の磁鉄鉱の鉱床があり、加藤謙次郎
名、多分彼のものと思われる調査論文がネットに
出ている。レアメタルのチタンは今輸入に頼っ
ているが、いつか岩手県の鉱床が注目される日
が来るかもしれない。

財団法人宮沢賢治記念会会報「イーハトーブ
短信第30号」(1999年3月)に宮沢賢治研究の佐
藤成が寄せた一文「バアバンク ブラザア 賢治と
秀松」には「秀松のもとには高農時代に賢治とと
もに採取した岩石、鉱物の標本が整理され箱に入
れられてあった」に続いて「長男は東北大学理学
部地質科教室で学び」とある。ここは加藤謙次郎
の本拠地。生涯の大半を岩石研究と教育で送っ
た。昭和44年に仙台大学の第2代学長に就任。4
8年まで大学運営に携わった。

時代は遡る。宮沢賢治は昭和6年9月19日仙
台市で宮城県庁農務科のあと茂市ヶ坂(現在の
青葉区本町)の加藤謙次郎宅を訪れた。少年時
代『石っこ賢さん』と呼ばれた賢治と、岩石一筋の
謙次郎。二人のケンさんが何の話をしたのかは知
らない。

『農民芸術概論綱要』の
「メモ用の書き込み」
田中 史郎

宮沢賢治にかんしても大内秀明先生から学ん
だ。賢治の『農民芸術概論綱要』には、「メモ用の
書き込み」が二つあるという。

その一つは、「農民芸術の興隆」章の「いまわ
れらにはただ労働が 生存があるばかりである」
という元々の一文に添えられたもので、そこに、
「Wim. 労働はそれ自身に於いて善なりとの信条
苦楽 苦行外道」と記されているという。「Wi
m」とは、William モリスをさすと思われるが、「苦

楽 苦行外道」の意味がわかりにくい。そこで、こ
れらの言葉を調べると、「苦楽(くがく)」とは仏教
用語では「苦しむことを楽しむこと」、そして「苦行
外道」とは、「過度の苦痛を伴う修行は誤りである」
ということらしい。ここで「苦」を「働くこと」や「労働」
と置き換えれば意味が通りやすい。

そうだとすれば、先の「書き込み」は、モリスが
「労働を本質的に悦ばしいものである」という理念
を持っていることの確認、そして、それゆえ、「働く
ことは楽しいこと」であり、また、そのような「喜びの
ない労働はそれ自体が誤りだ」という、自らへの再
確認ということであろうか。

そしてもう一つは、同章の「芸術をもてあの灰色
の労働を燃せ」という文に添えられたもので、「芸
術の回復は労働に於ける悦びの回復でなければ
ならぬ Art is man's expression of his joy in
labour. 労働は本能である 労働は常に苦痛
ではない 労働は常に創造である 労働は常に
享楽である 人間を犠牲にして生産に仕ふるとき
苦痛となる トロツキー」と書き込まれていると。も
ともと「芸術をもてあの灰色の労働を燃せ」という
一文は、モリスの「Art is ~.」を踏まえてのものだ
といわれているが、その内容が、「芸術の回復は
労働に於ける悦びの回復でなければならぬ」とき
わめて解りやすく表現されている。そして、それ以
降の「労働は本能である～人間を犠牲にして生
産に仕ふるとき苦痛となる」の一連の文句の末に
「トロツキー」と記されているのは興味深い。トロ
ツキーの文献の一部からの引用か、あるいは文献
から導かれた賢治の文言か、定かではないが、賢
治がトロツキーを肯定的に読んでいたことは間違
いなかろう。こうした点の探求も今後の宿題だ。

賢治が誕生した1896年は、モリスが世を去った
年である。



「はなまきグリーン・ツーリズム推進協議会」より

宮沢賢治と草野心平の “深い”交流

半田 正樹

宮沢賢治が広く世間に知られるきっかけをつくった重要人物、その一人が草野心平である。賢治が心平より七つ年長だったが、ついに二人は対面で会うことはなく、もっぱら書簡や詩の同人誌などを通じての交流だったという。いわば「詩と言葉」を通じた交わりによって、互いに相手の比類なき詩才を嗅ぎとったということらしい。周知のように賢治は亡くなる一年前に初の詩集『春と修羅』を自費出版した。心平がこれにすこぶる感入り、高村光太郎はじめ小野十三郎や萩原朔太郎など多くの詩人たちに推奨したという。心平によって賢治が世に出る道が開かれたというゆえんである。

その心平が、前橋に移り住んだ頃、詩では生活できず貧乏のどん底にあった。そこで賢治に「米一俵頼む」と電報を打ったというエピソードがある。心平が、賢治をよく知る森惣一（森荘巳池）から、賢治は百姓をやり、ベートーヴェンを聴き、チェロを弾いていると聞いたことに起因したことだったらしい。つまり、心平は賢治が広い大農場をもち「優雅に暮らして」いるのであれば、米一俵ぐらいわけなく送ってくれるはずと思い込んでいたというわけである。

実際のところは、賢治が「羅須地人協会」を創って間もなくの頃であり、北上川の川べりを開墾して野菜畑をつくり始めたばかりで、賢治にはその余裕などあるはずもなかった。それでも、賢治は「いくらかの足しになったらうれしい」というはがきとともに『造園学』の本を送って、心平の無心に応えたという。

これが思わぬ顛末を生んだ。心平は、賢治から届いた『造園学』を古本屋で換金するのではな

く、当時庭造りを始めたというわさのあった室生犀星に目をつけて売りさばこうとしたからである。本を送った上で「いくらでもいいから買ってくれ」とはがきを出したという。犀星からは、「朔太郎の関係で、前橋は自分の第二の故郷」といった文面のはがきが届き、間を置かず「一円の小為替が入った封書」が送られてきたという。しかし、封書には「前のはがき」を処分してくれとの文面があり、これになぜか「不快を覚えた」心平は「前のはがき、新しい手紙、小為替」だけでなく「送った本の返送用の切手」を一緒くたにして送付したという。賢治の側隠の情は着地できぬまま消えた。詩人は心平のみならず犀星も含め誰もがみんなひどく「貧しかった」時代の余話というほかない。

困窮をきわめた心平が「やきとりや」を始めたことは知られている。それに対して賢治がおすすりレシピを送ったという話もある。下戸の賢治の「おすすりレシピ」。いったいどんなものだったのか、いたくわたしたちの気をそそのものではあるまいか。

【参考文献】

『草野心平自伝 凸凹の道』文化出版局；橋本千代治『火の車板前帖』文化出版局；金井真紀『酒場學校の日々』ちくま文庫；「宮沢賢治と草野心平の知られざる親交……心平記念文学館 学芸員・長谷川由美さんに聞く」文：飯田能理子

<https://iwaki-alios.jp/cd/app/?C=blog&H=default&D=01102>

精神は気高く、心は貧しくか

末永 茂

高校の恩師が宮沢賢治のことを引用し、その弟子の松田甚次郎や真壁仁のことを熱心に語る機会が多かった。「現代国語」の授業は全国レベルで格調高いもので、そこに宮沢賢治の風格のようなものを感じることが出来た。また、恩師は佐高信の師でもあるから、大体のところ考える傾向は推

察できるだろう。自らの生い立ちも貧農出身ということで、彼らへの思いも人方ならぬものがあった。ローカルな知識人は一種独特な雰囲気があり、我絶対のようなところがある。卒業後も時折、新庄の立派な書齋を訪れたり、駒場の日本近代文学館で資料収集を手伝ったことなどあった。しかし、師は反近代というか農本主義を崇拝するものだから、私の世界精神志向とは相反するところがあり、決して交わることはなかった。12番目の末っ子として貧農に限りなく郷愁を抱く師であったから、宮沢賢治ほど早逝ではなかったが、生来の食の細さもあってか60代前半で鬼箱に入ってしまった。生涯高校教員として恵まれた境遇にあり、多くの教え子を従えながら貧困を経験することはなかったはずだが、精神は貧者そのもので生涯を貫いた。他者の観念というものは変えられるものではない、とその時悟ったように思う。

そんなことがありながらも『資本論』と宇野理論を独習していた私は、マルクス経済学が宮沢賢治に回帰することはないだろうと考えていた。だが、急進マルクス主義者が親鸞に惚れ込んだり、超国家主義の信奉者になって、満州国建国に多大な労力を費やしてきた人も珍しくない。それ故大内秀明氏がこういう胸中に陥ってもなんら不思議ではない。そこに辿り着いたのがどういう経緯かは知らないが、勝手な解釈では老境に入ったからとしか思えない。また、マルクス経済学者の多くがソ連崩壊にかなりショックを受けていた、と周囲の研究者から聞いていたからその影響もあったのだろう(か)。私は70年代後半からいつソ連は崩壊するのか？とそんなことばかり気になっていたから、ゼミの先生方からは「なんていう奴だ！」「単位はやるから、もうゼミに来なくてもいい！」と、ことある毎に罵倒されていた。

時の流れは急激である。ロシア、中東での戦火はどこに飛び火してもおかしくない時代になりつつある。そして、教条主義は容易に幻想的思想を生み出す最大の土壌である。心して、これまで手にしてきた文献を読み直したいとの思いが募る。

(2025/06/22)

宗教の亡霊ではなく、 目の前の現実

金森 明男

バンス米国副大統領はフォックスニュースのシヨン・ハニティ氏とのインタビューで以下の様に語ったと報道された。「まず家族を愛し、それから隣人を愛し、それからコミュニティを愛し、それから自国の市民を愛し、その後によく世界の残りの人々に目を向けるべきだ。」(『ニューズウィーク日本版』2025.2.14)。この発言は、否定されるべきものではないか？ この様に確信を持って述べる事か？ 実際に、最初から、「あなたの家族を愛しなさい。」と命令しなければ、権威を保てないとも思うのでは、まとまる事柄も破綻するのが目に見える。一旦、他者として意識すれば、次の段階では、対立が発生する。だけれども、『聖書』の教えに関わる事柄を、どの様に考えているのか？

イエスは、「たとえを用いて話す」ことについて次の様に語る。「それは、『彼らが見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、理解できず、こうして、立ち帰って赦されることがない』ようになるためである。」(「マルコによる福音書」第4章12節、新共同訳)。「ようになるためである」とはどのような事態か？ いつも見てないし、見ても認めないし、聞いても理解出来ないの、たとえで話すのか？

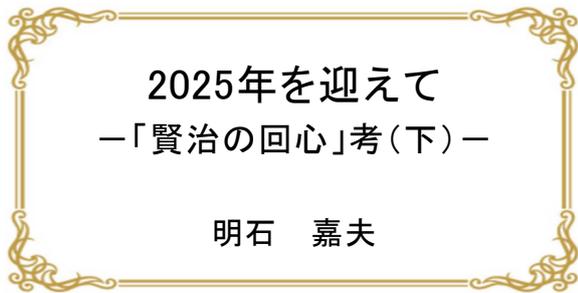
色々な人がいるはずなのに、単純明快に無知蒙昧な輩と決め付けているが、そう考えたのであれば、その後の行動は命令するしかないだろう。

だけれども、「あなたの家族を愛しなさい。」命令する事なのか？ この人たちは他人に云われて愛すのか？ そうは思いたくないが、このような文章に馴染んでいる者にとっては、命令する事が自然に出て来るのだろう。相手の、他者の視点、だから、相手の、他者の思いが完全に抜けている。

宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』の序論です。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」最初に読んだ時、誇大妄想としか思えなかったのだけれど、対象を限定する事無く、地球上の全てのモノを対象にしますし、その困難さを考えれば、無限の時間を対象にしています。そして賢治は、結論で、その方策を示します。「理解を了へばわれらは斯る論をも棄つる / 畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考があるのみである」

物事にこだわるなとし、それは、その時の考えだからと、改善の余地を残します。個人から出発し、こだわらない事で自他共に強制する事なく、絶えず、振り返る機会を与えてくれて、それが次の機会へ進む原動力となります。



梅原猛の見た宮沢賢治

梅原猛は著作集十九『美と倫理の矛盾』において「宮沢賢治は仏教的なまたは半仏教的な多くの思想家と違って仏教を人間観ではなく世界観として受け取った。賢治の仏教は日蓮宗というより『法華経』信仰であったが彼は仏教の中に近代科学の成果と一致する雄大な世界観を見た」のだという。

さらに梅原猛は著作集四『地獄の思想』の中で賢治の大乗仏教とくに『法華経』からの影響は次の三つの思想があるという。

(1) 生命の思想 実体は宇宙的生命(自然の大生命のあらわれ)『法華経』には永遠の生命論が含まれる。賢治の詩や童話の中には己を大宇宙の生命と一体として感じられる魂の恍惚が秘められている。

(2) 修羅の思想 これは賢治の世界観の根底にかかわる問題。『よだかの星』は近代日本文学が生んだもっとも深い、もっとも高い精神の表現で

はないか。これは修羅の世界をテーマにしている。

(3) 菩薩の思想 賢治のなかに流れていたのは「捨身飼虎」の精神、他人の幸福のために死ぬことが賢治の一生を通じての大きな理想であった。

梅原猛は賢治の思想には生命、修羅、菩薩の思想が『法華経』信仰の中に脈々と流れているという。賢治の生涯に思いをはせなる時まさしくこの通りだったのではないかと思う。

浄土教と法華経

賢治は法華経の壮大な世界観に感動し熱心な法華経の信者となった。では、賢治が十八歳まで帰依してきた浄土教の世界観はいかなるものか。識者の中には浄土教には世界観が無いのだという人もいる。

千葉一幹著『宮沢賢治』によれば「浄土真宗は摂受的であり個人救済に関心を集中している。父政次郎の信仰する浄土真宗はだから批判されなければならない」という。

賢治は父政次郎が家業としている質屋や古着屋の仕事を嫌っていた。賢治には政次郎がやっている家業が貧乏人から不当に利益を収奪しているように思ったのかも知れない。賢治は政次郎に家業を替えるように強く要求したという。まるで政次郎が賢治の童話「なめとこ山の熊」に登場する狡猾な荒物屋の主人のようではないか。浄土教は荒物屋の主人のような阿漕な商売を許しているのか。

浄土教は富・幸福・無病などを得るという功利利益観を否定していない。親鸞も『現世利益和讃』四において「南無阿弥陀仏をとえればこの世の利益きわもなし」といい、「現世利益」を認めているのである。

福島章は著書『宮沢賢治一心の軌跡』において「浄土真宗の静的・他力本願的・秩序的な世界にくらべると法華経の世界観はその正反対に生命的かつ力動的である。それが賢治の魂の奥底にあったデモニッシュなものが法華経の力強い生命の賛歌、壮大なアミニズムの世界と共鳴して賢治に「体の震えを禁じ得ぬ」感動を与えたのだ

ろう」という。

しかし浄土真宗の熱心な信者である三國連太郎は著書『親鸞に至る道』で「親鸞の「自然法爾」とは他力の信の究極に開かれる悟りの世界を示したもので、親鸞の仏教の到達点を示す言葉であります。つまり宇宙的自然と人間社会の一体化した自己が確立したとき、いっさいの呪縛から解放された人間の境涯が確立されるのだということであります」といっている。このように浄土真宗の世界観を感じ取っている人もいるのである。

宮沢賢治の重層的な法華経信仰

結局のところ「賢治の回心」とは何であったのか。賢治が浄土真宗から法華経に回心したからといって賢治の仏教に対する考え方が百八十度転回したわけではない。私は賢治の仏教の理解は重層的に積み上げられたものだと思う。賢治は浄土真宗から法華経へ信仰を深めたが盛岡の禅寺で座禅の体験もし、教会でキリスト教の話も聞いている。

編集後記

今号は、宮沢賢治(1896～1933)の誕生日が8月27日、命日が9月21日なので、それに因んで、賢治にまつわるエッセー中心に構成した。

さて、手元に本会が発行した『ウィリアム・モリスと夏目、それから宮沢賢治—仙台・羅須地人協会一周年と「賢治とモリスの館」十周年記念会—』(2015年12月刊)がある。

そこで、大内先生は以下のように述べている。「...宮沢賢治もまた(漱石と同じく)、労農派、労農党のシンパです。...賢治の羅須地人協会が2年半で活動を止めたのは、官憲による弾圧から身を守ったのでは、と私は考えています。この時期、花巻に羅須地人協会、伊豆大島に大島農芸学校、新庄に最上協働村塾、そして大阪の大阪労働学校などが相次いで活動を始めていた。いずれも国家権力から自由な、農民学校や労働学校です。...そして1928年...には3.15事件が起こった。治安維持法で全国の共産党、労農党や関係者など、1500人が検挙された。さらに8月に岩手山麓で陸軍大演習があり天皇が来るということでさまざまな予防検束も始まった。旧制盛岡中学校の「社会科学研究会」まで徹底的に弾圧した。宮沢賢治は「弾圧の手が及ぶのを恐れて仮病を使った」と賢治研究家の鈴木守さんは書いています。」

改めて、戦争前夜のこの時代と、その時代を生き、賢治の思想や行動に思いをめぐらせては如何だろうか。

山折哲雄は著書『デクノボーになりたい』で「少年期に自分の心身に沁み込んだ浄土真宗の教え、あるいは親鸞の教えというものが消え去るようなことはないはずです」という。私も同感です。賢治の信仰は浄土真宗、禅宗、キリスト教を内抱し、法華経によって集大成された壮大かつ重層的な信仰であったように思うのです。このことは賢治が書いた数々の詩や童話からもうかがえることです。

賢治が病床にあって書いた「雨ニモマケズ」のデクノボーは浄土真宗でいう「妙好人」のことだという説もあります。もしそうであれば賢治は最後に浄土真宗に回帰したということもいえると思います。

今回の論考で感じたことがある。それは賢治の思想は『正法眼蔵』を書いた道元禅師の思想と相通じるものがあるということだ。道元禅師は法語で『法華経』は「積尊所説の諸経の大王、大師」といって『法華経』を賛辞している。私にはこの二人の思想には法華経の世界がどこまでも広がっているように思われる。

センタードつうしん 第11号 2025年8月

仙台・羅須地人協会

〒980-0811 仙台市青葉区一番町2-5-12 一番町中央ビル 8階

「シニアネット仙台」内 Tel:022-266-5650 Fax:022-266-5662

HP <https://rasuchijin.jp/> Mail rasuchijin-office@rasuchijin.jp

